# 文化

bunka@asahi.com

# 「藻塩焼き」縄文が起源

## 万葉集に登場 ゴカイで証明

日本古来の製塩法の一つに、万葉集に「朝凪に玉藻刈りつつ夕凪に藻塩焼きつつ」と詠まれた「藻塩焼き」がある。海水がしみ込んだ海藻を焼いて塩を作る方法だ。この製塩法が縄文時代から行われていたことを示す資料が見つかった。従来考えられていた弥生時代前期より800年前後さかのぼる。

茨城県稲敷市の広畑貝塚で出土した土と灰の塊で縦25センチ、横16センチ、厚さ15センチ。製塩用と考えられる土器片も含まれており、縄文後期後半～晩期初め（約3千年前）のものとみられる。

文部科学省の科学研究費を受けた明治大教授の阿部芳郎さん（考古学）のチームが稲敷市の協力で分析。焼けたウズマキゴカイ類の殻が大量に含まれていることがわかった。千葉県立中央博物館主任上席研究員の黒住耐二さん（貝類学）によると、ウズマキゴカイは殻の直径2～3ミリ。日本各地に生息し、海藻などに付着して暮らしている。

阿部さんは「本来はアマモなどの海藻に付着していたのが、藻塩焼きの際に火を受け、塩ができた後に灰や土器の破片と共に廃棄されて、貝層の中で固まったのではないか」と話す。

藻塩焼きでは、海藻に海水をかけて乾かした後、焼いて藻灰を作り、それらを塩水に溶かし入れて濃度を高め、煮詰めて塩を作ったと推定されている。

アマモに付着したウズマキゴカイ

文献以外で藻塩焼きが実際に確認された例はわずか。幻の製塩法と言われてきた。1990年、古墳時代～古代の松崎遺跡（愛知県）で初めて確認され、次いで比恵遺跡や板付遺跡（いずれも福岡市）の弥生時代前期（約2200年前）の層でも見つかった。広畑貝塚の例はそれらより800年も古い。

日本列島の製塩は、茨城県の霞ケ浦沿岸で縄文後期に始まったと考えられてきた。海水を煮詰める際に使われたとみられる、専用の「製塩土器」がこの時期、この地域で出土し始めるからだ。藻塩焼きの跡と製塩土器が一緒に見つかった今回の発見は、両者の間に何らかの関係があったことを示唆する。広畑貝塚は霞ケ浦の近く。縄文時代後期には間近まで海が入り込んでいた。

阿部さんは「縄文時代の貝塚からは焼けたウズマキゴカイや海藻に付く微小な貝が見つかることがあったが、ほとんど注目されてこなかった。今後、こうした海の生物と製塩土器の研究とを併せて進め、藻塩焼きの意義や開始時期を学際的に追究していきたい」と話している。

（宮代栄一）